

の業績により、青洲の乳癌手術の予後成績が窺い知れる。次いで、華岡青洲の系譜的研究、妹背佐次衛家の系譜や藍屋利兵衛家の系譜も実施調査で明らかにしている。

中川修亭の「麻薬考」は、青洲の創製した経口全身麻酔薬である「麻沸散」の開発過程のわかる唯一の書物である。この書物に関して、初めて論考したのが宗田 一氏であり、薬学者の立場からこの麻酔薬の開発経緯を一連の論考で明らかにした。しかし、著者は宗田氏が発見した二種類の写本のみならず、合計四種の写本を新発見され、その内容を十分に比較検討し、なぜ青洲がこの処方構成に至るまでに十年近くの歳月を要したのかも明らかにしている。また、「麻沸散」を各種動物実験ばかりではなく、人にも用いて青洲が人体実験しなければいけなかった理由を明確にしている。この点で、著者は実験医史学とも称すべき新しい分野を開拓している。

著者は『乳巖治験録』、『麻薬考』を写真版で著書内に収めており、後学の研究者が誰でも利用できるように気を使っている。このことも、この著書を一段とすばらしいものとしている点である。

これまで、華岡青洲を研究しようと思えば、呉 秀三氏の書物以外では、森 慶三・市原 硬・竹林 弘編『医聖華岡青洲』、南 圭三編『華岡青洲』、上山英明著『華岡青洲先生その業績とひととなり』が研究書として用いられてきたが呉氏以降の書物はすべて呉氏の言及された内容を踏襲している。著者は偉大な医史学者でも史実の誤認がありうるのだと

初めて批判した。この点において、『華岡青洲の新研究』は今後色褪せる事なく、華岡青洲の研究書として座右に備えておかなければならない書物になりうると確信する。

最後に著者が入手した文献、資料類を華岡青洲研究書誌としてまとめている。この書誌は華岡青洲研究を行うにあたって必要欠くべからざる書物がわかるすばらしいものである。

(高橋 均)

〔岩波出版サービスマンセンター、東京都千代田区神田神保町二一三、電話〇三―三二六三―七〇七八、二〇〇二年十月十三日、菊判、非売品〕

日和田邦男 編

### 『高血圧研究の歴史』

雑誌「血圧」誌に十二回にわたり連載された『高血圧研究の歴史』は血圧測定のリヴァ・ロッチの上腕カフ法の開発以来、一〇〇年にわたる高血圧研究の歴史とその成果、本能性高血圧の成因、遺伝説、中枢神経説、腎臓説、レニン・アンジオテンシン系を詳述し、さらに二次高血圧について言及している。後半では降圧療法の歴史、薬物開発の歴史、薬物の有効性について述べ、薬物療法のガイド・ラインについて初期から今日までの経過を論述している。そして最後に二十一世紀の高血圧研究の方向を議論している。

十四名の最先端研究者による執筆であるので、内容は豊富であり、医師のみならず、一般の読者にも読み甲斐のある本といえよう。ただし一部難解なところも多い。

血圧測定 of 歴史などは医療関係以外の人も興味あるのでもっと詳細な歴史の物語があれば読みごたえが出てきて良かったかもしれない。歴史はどんな場合でも興味があり、難解な内容でも把握しやすくする要素を持つものである。

荒川による高血圧研究の環境作りはペイジエ博士の個人史と、国際高血圧学会の誕生までがよくわかり、導入部としてわかりやすい。

藤島のフラミンガム研究と久山町研究は、アメリカと日本における着実な調査の内容と成果がよく理解できる。

本能性高血圧の成因は困難な学問的問題であるので、遺伝説にしても中枢神経説、腎臓説にしても一般読者は理解が困難である。医師でも専門家以外はかなり難解であるので、もう少し平易な解説が望まれる。さもないと次の大事な降圧療法の歴史、薬物の有効性を判定するための大規模臨床試験、そして高血圧治療のガイドラインに読み進めなくなってしまう。

藤井の薬物開発の歴史はわかりやすく、おのおのの薬剤がどの位置にあるかがよくわかり、高血圧治療に携わる医師も、服薬する患者も一読しておくことが極めて重要なことである。築山・大塚による大規模試験の章では世界における多数の試験を取り上げて、その結果をまとめ、老年者、糖尿病ある

いは腎障害を伴う高血圧症例においてどこを至適降圧とするのがよいのかの検証から、多数の降圧剤の中で何をを用いて降圧すべきかを判断するのに有用な見解が述べられている。利尿薬に始まり $\beta$ -遮断薬、 $Ca^{2+}$ 拮抗薬、ACE-阻害薬、 $\alpha$ -遮断薬、A II受容体拮抗薬とさまざまな薬剤が開発されそれらの薬剤をどのように使い分けるか、臨床医師としては困惑するところであるが、ガイドラインの中で説得力のある説明がなされ安心して降圧療法をすることができるようになる。

WHOのガイドラインもわが国の高血圧学会のガイドラインも降圧目標を一三〇/八五mmHgとし、さきあげた六種類の第一選択薬と生活習慣で減塩、節酒、カロリー制限、運動を勧めている。

結論的にいえば研究者は自分の研究の流れの道筋を正確に把握するために、医師は高血圧を理解し正しい薬剤の使用法を完全に自分のものとするために、そして一般読者は高血圧とその治療法を正しく理解する上で、難しいところはとばしてよいかを一読の価値がある。

(藤倉 一郎)

(先端医学社、東京都中央区東日本橋一―九一七 G I 東日本橋ビル、電話〇三―五八〇二―二一〇〇、平成十四年五月二十日、A五判、二〇〇頁、三二〇〇円)